

「練習のしがいがある」というころ。今までできなかったマジックができるようになったり、練習すればするほど、不思議なことができるようになるからです。マジックっていうと普通の人には実感ないと思うけど、体育で一つの技ができるようになったみたいな感じによくにてる気がします。僕は飽きやすいのにマジックの練習は飽きずできて、毎日かかさず練習しています。



他には手品ライ部の発表のとき、みんなの前でやるあの緊張感です。だんだん慣れてきて大丈夫になってきて失敗もないんだけどまだやっぱり緊張して、あの後「終わった〜！」っていう達成感みたいなのが気持ちいいです。見て喜んでくれたり見てビックリしてくれるのが一番のやる理由です。

また今度、手品部の発表があると思います。マジックの不思議さと驚きを体験してください。その時にボクが感じた「すごい！」や「やりたい」と思ってくれるような人が出てくるとボクはうれしいです。



※手品部は水曜日一時四十分から和室で活動してるんでぜひ来てください。

中島 水樹（中2）

西表島（沖縄）の良い所



今回ヴォイスの記事でボクが選んだテーマ、西表という沖縄でも唯一アマゾン地帯のある島だ。1週間にわたって西表島の自然を体感しよう、と言う事で、この春休みにいってきました。始めの内は1週間長いとも思ったけど実際早かった。

沖縄生活1日目、東京から沖縄まで片道約六時間もかかった。でも飛行機から見た沖縄の海は最高輝くエメラルドグリーン。久しぶりに海を見て感動した。

沖縄着、飛行機から降りた瞬間感じた事は、『暑〜い』（長袖長ズボン）で来たから暑い、暑い。その日の沖縄の気温なんと28度。全く春とは思えない気温だ。しかし驚くのはまだ早い、これから繰り広げられるぼうけんは凄いぞ。

1日目は、ぼくらが泊まる西表の民宿（いるもて荘）に荷物を置き・・・そのあとそっこう海に行った。いるもて荘からは、5分ちよいで、ビーチに行ける。海パン一枚で海にダッシュ観光客に笑われた。「でも、そんなの関係ねえ〜」ビーチについたあ〜、海は太陽の光にあたってきれいに輝いている。サンゴは、美しく揺られ、熱帯魚と一緒に遊んでいた。1日目からこんな素晴らしい光景を目にした。



そんな調子でワイワイしていた。あっという間に時間が過ぎて行った。楽しくてしょうがない、次は何をして遊ぼうかと考えているうちに、1日が終わる。そんな感じに過ごしていた。

だいたい1週間のできごとを言うと、発見したいきもの、植物をまあ～簡単に紹介します。

・フルーツばかり食って身体がフルーツ（洋梨）のような形になった、面白い生き物だ。「ガザミ」、身体は普通の大きめのカニ、しかしはさみは身体の半分のおおきさ・これには驚いた。大人の指を一発で切る程の力がある。（沖縄によくいるハブ、それをひと切り、ハブは早いのに、簡単に捕まえてしまう程の優れた神経（驚き）



・他には、「タカ」「猛毒海へび」「日本一長いシダ植物」「マンブローブ」さまざまな出会いをして来た。

そして帰りの日。1週間は早いと、とても感じた。西表島の生活を大げさに言うと1ヶ月分体感したほど凄かった。今回の文には納まらない程西表はヤバイ。帰りたくないと思う程楽しかった。まだまだ出来事はあった。「わかりますか？」それほど西表島は凄いて事です。

ぜひ、何かで沖縄旅行に行くとしたら、まずは西表島へ。きっとあなたにも素敵旅の思い出が待っているかもしれません。



木又 楽（中2）

音。

SUM41 との出会い。

中二の夏あたりに携帯のサイトで適当にダウンロードしてみたのがSUM41 だった。

その時の事はあんまり覚えてないけど、いつの間にか毎日ずーっと聴いてるようになってた。今思うとなんなんだったんだらうって思う。(笑)
いつの間にか知ってた。

SUM41 の好きな曲 (最近) +これを書いた時の気分。

Slipping Away (声のかすれ具合が良い。)

Speak of the Devil (イントロから転調するあたりが好き。)

Mr. Amsterdam (スピード感が良い。)

Hooch(ギターソロがいい。)



Bullet For My Valentine(以下BFMV) との出会い。

実は、SUM41 より先で、これも携帯で適当にとってみた中のひとつで、とった時(約2年前)は2、3回くらいしか聴かなかつたんだけど、SUM41 ばかり聴いてて飽きてきたのか、最近ではSUM41 は聴かなくて、BFMV ばかり聴いてるようになった。音楽の趣味も若干変わった気もする。というか、音楽の選択肢が増えたと思う。パンクとかは今でも好きだけど、メタル系のも聴くようになった。むしろそっち系ばかりかな。

BFMV と SUM41 の違い

ジャンルも違うけど、んー、なんて言えばいいんだろ・・・
当たり前だけど「音」が違うし、「伝えたい事」っていうのも違うと思う。

BFMV は Vo[?]みたいなのが入ってるんだけど、自分はそれはあんまり好きじゃない。曲自体あんまり好きじゃないのもあるんだけど・・・じゃあ何が好きなのかっていうのは、ギター之音とかメロディーとか「うまく言葉にできない部分」が自分に合ってる気がする。それか基本的にそんなに気にしてないのかも。



BFMV オススメ曲

Say Goodbye (Vo の声)

All These Things I Hate (Revolve Around Me) (動画で PV を見たら何となく分かってくる。)

The Poison (自分はギターの練習曲として聴く。)

Hand of Blood (自分はギターの音だけ聴く。Vo は微妙。)

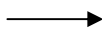
10 years today (ギターのハモリがきれい。全体がまとまっている。)

とりあえず自分が好きな曲をあげてみた。

ちょっと興味が湧いた人は youtube かなんかで聴いてみてください。

佐々木 優太 (高1)

(Wikipedia からの抜粋)



Sum 41 (サム・フォーティワン) は、[カナダ](#)出身の[パンク/メタルバンド](#)である。現在は3人で活動している。
"We're All To Blame"は映画『[ゴジラ FINAL WARS](#)』の挿入歌に使用され、話題を呼んだ。また『[スパイダーマン](#)』の挿入歌の"What We're All About"も歌っている。

ブレット・フォー・マイ・ヴァレンタイン (Bullet For My Valentine) は、イギリス出身の[ヘヴィメタルバンド](#)。BFMV と略される場合がある。[エモーショナル・ハードコア](#)と呼ばれる一連の若手バンドたちと同系列で扱われることが多い(彼等はこれに対し難色を示している)が、[アイアン・メイデン](#)や[メタリカ](#)といったメタルバンドからの影響を前面に出した[独特な音楽性](#)を持つ。

オニが「ぴゅろお」と叫ぶ

～『鴨川ホルモー』を読んで～

舞台は京都。京大の新入生の安倍は、貧しいので新歓コンパに片っ端から行って食費を浮かせていました。ある日、京大青竜会なるちょっと危なそうな名前を持つサークルのコンパへ。すると美しき美鼻を持つ乙女に出会ってしまい、そのまま入会してしまいます。いったい何のサークルなんだろう？ それも知らずになんとなくサークルに行っていました。そしてある日、『ホルモー』のことを知らされます。異形のものを使って戦うらしいが、いったい何なのかよく分からない。よく分からぬまま、『ホルモー』へと向かっていきます・・・

傑作です。なんてバカらしくて、楽しそうな毎日なんだろう。これを読んでいて少し京大に入りたくなってきました・・・ これはフィクションなんだけど、どこかリアルなんだよなあ。サークルか。いいなあ。もしかしたら、リアルかどうかということではなくて楽しそうなところがいいのかもなあ。自由の森学園でもこんなことができたらいいなあ、と思える楽しさみたいなものがあります。



もっと細かいところを突っ込んで書いて欲しい気もしたけれど、「吉田の諸葛孔明」凡ちゃんの智謀の冴えとか) ととても面白かったです。と思ったら、『ホルモー六景』というのがありました。でも、そちらはう～んなんかもう1つ、という感じでした。やっぱり『鴨川ホルモー』が面白いです！ どうやら映画化されるらしい、というはなしを聞きましたが、映像が目に見えんできます。「鹿男」も面白いし、万城目学って人は凄いなあ。「鹿男あをによし」も、「鴨川ホルモー」も、両方ともおすすめです。(『鹿男あをによし』は、ならの女学院が舞台の面白い物語です。TVドラマ化もされました。)

中島 大地 (高1)

「放課後も食堂あいてるよ」

放課後、何もする事がない、けど家に帰るのもなんだか一いつて時、私は「じゃあ、食堂でお茶でもするか」って。寒い、ちょっと息ぬき、誰かとお話したい、とりあえず暇、そんな時とかも食堂へ。高校に上がってからのこの1年をふりかえってみると、本当にたくさんの時間を私は食堂ですごしたな一と思う。それは、高校1年生の教室の場所が食堂に近いって言うのも大きいのかな。パッと行ってパッと帰ってこれるから、授業の合間の休み時間とかにも食堂に行ったし。そのせいか、教室に授業以外でいる時間が少なかったかも。私は、食堂でお茶しながら、話したりグデグデしたりする時間がけっこう気に入っていて、なんかいごちいいな一いつて思う。じゃあなんで食堂でお茶するのはいごちいいんだろうって考えてみた。それは、いつでも汲んで飲めるあったかいお茶と、必ず人がいるってことかなって。あったかいお茶は会話と会話の「間」をうめてくれる。しゃべらない時間をいごちのいい空気にしてくれる。そして、食堂には常に人がいる。ひとけのない放課後の廊下や教室から食堂に来ると、なんだかホーッとなる。そこには絶対食堂のおばちゃん達がいて、お茶を飲んだり、何かしてる人達とかもいたりして。私が食堂に行くとホーッとするのは、いつ行ってもあると言う環境なんだな一いつて思う。



こんな感じで私は食堂によくいきます。放課後とかのあいた時間に食堂に来てみるのもいいかもよ。

Ps. 私がこの文章を書き終えた時よりずいぶん暖かくなり、食堂に体をあたたために行く事はなくなってきました。この文章を『ヴォイス』に載せるにあたり、その許可をもらいに、食堂のおばちゃん（泥谷さん）に読んでもらいました。泥谷さんは「食堂は開けているんです。」と言っていました。「開いている」のではなく「開けている」居場所を作ってくれているのだな一いつて思いました。

小金澤 基（高2）

「なにしよう、なにできる。」

あれもほしい、これもほしい。季節がかわれば服もかわり、新曲が出てきたりしたと思ったら、CDプレイヤーや自転車が壊れていたりして。なぜか、何かしら「お金」が必要になってくる。それなのに、部活があったりするのに行事の企画が立ち上がったと思ったら、課題が山積みになっていたりして、もしかしたら、学生って忙しい。

求人誌とか見てみると、「新しい出会い！」とか「学生大歓迎！！」とか書いてあるけど、「学生」だからこそ、学校生活の時間が惜しいと思います。

お金は無いけど時間はある、お金はあるけど時間はない。そんなどうしようもないグルグルの中に入ったら、いやでもやりくり上手になるのか、なにかを諦めるのか。あれもこれもなんて無理なのか、無理じゃないのか。

ただ、短期～長期に事務や接客、飲食店から派遣から、多種多様すぎるくらいの職場があつて。思いきって働いてみたら、あんがい自分に合っていて、頑張った分だけお金がもらえて。

そんなこと考えると…バイトやらないのも、もったいない気もしてきます。何かするためにアルバイトをするのか、何かするためにアルバイトしないのか。



学生だから楽しいし、できる事もしくはやりたい事、沢山あるかもしれないから。

留まる 踏み出す 何かするのは自分次第。

なにか楽しんだり、なにかできる自分が見つかる。新しい場所。ふれてみるのも、わるくないかもしれません。

深沢 周 (高3)

“他者と交わる”

今回は私の働いている居食屋和民を通して感じた“出会い”の大切さについて少し話させていただきます。居食屋とは全く面白い所で、たくさんの人たちが様々な思いをもってやってきます。ご飯は家で食べる習慣を持つ日本人がわざわざ外へ食べに来るにはまだそれなりの理由が必要で、そんな少し特別な雰囲気を持った人たちを観ていると、いろいろな発見がございます。

ある時、2人組のサラリーマンにおかわりはいかがですかと尋ねますと、若い方の男性はまだ半分しか減っていない自分のグラスをチラッと見てから「いや結構です」と呟きました。お酒が苦手な人なんだと察しがついたので引き下がろうと思っていますと、もう1人の上司らしき人が「もう一杯だ」と黒みがかったリングのような顔で言ったので、若い人は仕方なさそうに作り笑いを浮かべ「もう一杯ずつ下さい」と頭を下げた。サラリーマン（だけではもちろんないが）の上下関係は凄まじいものですが、こうやって今上司の機嫌をとるため頑張ってお酌している若い人たちが将来同じように人の上に立つのだろうかと思うと少し怖い気持ちになったりもします。

先程も触れましたが、居食屋にはたくさんの人たちが集まります。若い人たちが合コンしたり、熟年の男女が離婚の話で揉めていたり、おじさんが若い女の人を口説いていたり、一人ぼーっとカウンターで酒を飲んでいたりと様々です。時には赤ん坊を連れてくる家族もあって、タバコがあるのにつれてくるなと思いますが、うるさい居酒屋ですやすや眠る赤ん坊を見るとなんとも心が安らぎます。ある休日の夜、おばさんに「ちょっとお兄さん、日本酒3年前に頼んだんだけど」と、指を3本たて強い口調でにらまれました。実際には3分程度で、何だこの婆あと思いましたが、後から考えたら、自分にとってはたったの3分でもあの人にとっては大切な3分だったのかもしれないと思なおしました。

一期一会といいますが、知らない人と会うことは大切なものです。その人に“出会う”ということは一生に一度しか出来ません。同じ出会いは2つとなく、場所も時間もお互いの気持ちも違います。ありとあらゆる出会いの場がこの世にはございますが、一つ一つの出会いをもっと楽しんでみてはいかがでしょうか。

神座 想（高3）

どうして「ヴォイス」を発行するのか

このごろ、自由の森学園が、たくさんの「観客」と、一部の「舞台に立つ人」に二分されている気がします。これはあまり、いいことではないと思います。いろいろな人の声が表に出てこない、自由の森学園全体がだんだんと同じ色に染まっていってしまって、「多様性」や、「個性」といったものが見えなくなってしまいます。

そこで、批評紙・意見紙として『ヴォイス』を作ることになりました。

まず、ある物事をとらえるとき、生徒の視点を大切にします。大人の理屈や視点も、もちろんあるかと思いますが、まずは自分達自身のベースに戻って考えていこう、というわけです。どんなに立派な事を書こうと、まだ半人前、できないこともあります。でももしかしたら、まったく新しい視点が、ポッと生まれてくるかも知れません。そういったことを意識していけたらいいな、と思います。

それともう一つ、自由の森学園はあとの人たちに受け継ぐことがあまり上手ではない、と私たちは感じています。1回1回、いいものが出来ても、そこで終わってしまう、途切れてしまっています。しっかりと積み重ねて、つなげることで見えてくるものがあるはずなのに、それではもったいない。

『ヴォイス』とは言葉どおり、声のことです。鋭い指摘を取り上げ、小さなつぶやきも拾い上げ、その「器」として、声の発信源となっていきたいなあ、と思います。

編集 一同

Special thanks to all the Guests



Cham Cat

ヴォイス編集部

〒357-8550 埼玉県飯能市小岩井 613 自由の森学園図書館 出版相談室（大江）

Fax 042-972-6661 e-mail jibO@jyunomori.ac.jp

編集；佐々木優太・中島大地（高1）板垣奏男 小金沢 基（高2）神座 想・深沢 周（高3）

（表紙；佐々木優太）